

高齢化社会を生きる

① 停年後の人生と家族

野田久一

三年前から殆んど寝たきりの妻とマンションでの二人暮らしをしている七二歳の私が、今頃になって「自分たちの生きてきた記録」を書き始めたのは、次のようなことからである。

二人の自分史

この四月から始まったNHK朝の連続テレビ小説「おしん」を見ていて、その苦難と栄光の人生記録が、これからの一年間茶の間の期待を集めて展開されて行くのだと思ったとき、それに比べて三年前、高血圧で倒れて以来、寝たきりの状態となり、そのうえ脳軟化症の疾患のた

め言葉まで失い、今では、これまで歩いてきた七〇年余に及ぶ歲月での出来事を誰に語るすべもなく、いづれひっそりと消えて行くであろうこの妻の心情を思い、せめて子供や孫達だけにでもその波乱と苦闘に満ちた事実の粗筋だけでも書き残してやらねばならない、そして今それができるのは五〇年間苦楽を共にしてきた私よりないと思っただ。

名古屋市近郊の由緒ある大地主の四女として生まれ、多くの小作人達からも常に「お姫さま」と呼ばれ大切に育てられた彼女と、一人の兄妹の中の五男として貧しい家庭に生まれ、小学校を卒業後

S鉄工所に五年間の年期小僧として奴隷のような生活のなかを堪え抜いてきた私、救世軍で知り合い、それから三年後、甘い愛の言葉一つ語り合うこともなく、ただ「無産大衆のために」という共通の理想に燃えた同志として結婚したのは昭和九年九月十五日だった。

だが翌年十二月三十日には長女が急死し、また狂気のように戦争に突き進む軍国主義に抗するすべもなく私が召集されて満蒙の戦場に送られたあと、病弱な長男を抱え二男は死亡し、空襲、疎開、終戦等、動乱の戦中戦後を必死に切り抜け、また昭和三十五年冬、緊急入院して

- ① 停年後の人生と家族
- ② 地域活動から看護婦への道
- ③ 父母の看取りと私

二人の自分史／停年退職
職業訓練校に入学／スーパー店勤務
リハビリテーション／夫婦旅行
有料老人ホーム体験記（旅日記から）
伊豆韮山温泉病院
箱根仙石原温泉病院入院
退院／介護人／私にとって夫婦って何だろう
日是好日

からも次第に弱り行く体にむち打って三人の子供達を育てあげ、遂に力尽き倒れてしまった妻。

今、それらの出来事を書き始めたがその一枚一枚に当時の情景が鮮明に浮び上り、ある時は涙し、ある時は言い知れぬ感動を覚えるなどして、なかなか先に進まない。しかし、かりそめにも、この自分史が妻の墓前に捧げられるような悲しい事態にならないためには、もう美文名文はもとより、普段着で気楽に書くような時間的余裕はない。なりふりかまわず書きまくり突っ走らう。ゴールは近い。

停年退職

昭和四十三年五月三十一日、勤続二八年三月月に及ぶ会社生活には多くの思い出もあったが、今、それらを追憶しているいとまもないほどの忙しさで、終日社内の挨拶に歩き廻り、また昼食には工場長以下会社幹部らも集まって会食し、永年の労をねぎらってくれたりした。

こうして、またたく間に一日が暮れ、二二一萬円の退職金から退職前借金一七萬円を差し引かれ、残額一〇四萬円を現金で受取った私は、会社に最後の別れをつげ、家路を急いだ。私が退職金を現金で「希望したのは、当時一円の金にも苦勞していた妻に、生まれて初めてお目にかかる百萬円の重さを、じっくり味わせてやりたいと思っただけだが、しかし実際は、二人とも不安で一晩中眠れなかった。

こうして翌朝には、ひとまず労働金庫に預け肩の荷を降したが、これからの生活についてはとりあえず、来月から一年間支給されるはずの失業保険金で何とか食い継ぎ、その後、厚生年金の支給開始になる満六〇歳までの四年間は、これからじっくり考えることにした。

・当時の家庭状況

▲家族▼

長男 昭和三十九年結婚

別居

二女 本年結婚

別居

三男 大学一年生 自宅より通学

▲住宅▼

会社、住宅金融公庫から融資を受け横浜市南区中里町に分譲地五〇坪（百十萬円）を購入、住宅四DK（百五〇万円）を建て、四十年五月に転居

退職後、公共職業安定所に行き失業保険金の給付手続きを済ませたが、今後は毎月一回指定された日に出頭し、その日までの一カ月間に就業・未就業した日数などを申告することになっていた。しかし新しく就職しなかった私は、その後は毎月一回、職業安定所に出かけるだけの生活を続けていたが、年が明け昭和四十四年になると、そろそろ適当な動機先も探さねば、と考えるようになった。

二月になって指定日に安定所に行き、失業保険金の支給申請の手続きを済ませた後、何気なく掲示板を見ると、「中高年者の転職訓練生募集」の広告が眼にとまった。そして特典として、訓練中の一年間は失業保険金の給付が延長され、交通費全額負担、就労日の特別手当支給、とあるので、さっそく係りの人の所に行き内容を聞いてみたが、「これは主として駐留アメリカ軍や炭鉱からの離職者の雇傭を促進するために行われているものであり、それに年齢も五〇歳程度まで、とあるから君は駄目だ」とはねつけられ

てしまった。

しかし一年間勉強でき、しかも失業保険金も卒業まで継続されるという魅力に、私は何としてでも入学し、できれば電気科で一年間みっちり勉強して、テレビやラジオぐらい修理できる技能を身につけたいと思い、直接、職業訓練校に叩きつけて何とか入学できるように交渉しようかと決意した。

職業訓練校に入学

横浜市旭区希望ヶ丘にある、この神奈川県総合高等訓練校は、中学以上の学力と訓練に支障のない体力があれば誰でも入学する資格はあるが、実際は希望者が多く、特に時代の花形だった自動車整備などは定員四〇人に対して十数倍の競争率とのことだった（むろん一般学生には優遇制度はない）。しかし親切な生徒主任は、私の懇請に対して最後には「電気科などは競争が激しくてとても無理だが、塗装科なら定員に満たない年が多いから、それでよければ入学を許可してもよい」といつてくれたので、さっそく入学の諸手続きを済ませ、入学許可証明書を受取り安定所に持っていった。

昭和三十年企業内職業訓練所の設置が法律で義務づけられたので、東芝でも訓練所を開設するよう計画し、またそれに必要な実技指導員も現場の役付工員から

選抜することになり、会社から指命された私は、受験のための特訓を一カ月ほど受けた結果、機械実技指導員の国家試験に合格、以後、停年退職するまで会社の訓練所で実技指導の業務を行っていたが、今度は先生から生徒になるので、このことだけは履歴書にも書かなかった。

こうして昭和四十四年四月から一年間、通学定期で毎日訓練校に通った。生徒も中卒、高卒、大学卒の脱サラ組、私共のような職業転換者等、バラエティに富んだ混成学級で、午前中は学科、午後には実技を勉強していた。三カ月の基礎訓練が終了すると、雨の日は自動車等を室内で塗装実習し、晴天の場合は近くの団地などに出かけて一般住宅などを塗装するようにになった。しかし自動車にしても住宅でも、訓練生の実習用教材として作業しているため、普通十数万円もかかる住宅の塗装でも、材料費として四〜五万円程度でよく、そのうえ業者と違って手抜きせず懇切丁寧な仕上りで、期間も普通一〇人前後で塗装するため短期間に終るし、そのため依頼者も多く、お陰で住宅塗装の場合、三時の小休止のときなど豊富でおいしいお茶菓子のサーブिसなどもあってこのことに限っては他科の訓練生達から羨望的であった。

また塗装は他教科の訓練生が卒業後、殆んど会社、工場等に就職するのに対

し、塗装に関係ある会社に就職する以外にも、個人、あるいは数人で独立した塗装業を営む道も開けていたし、それに一般の塗装工のように現場で先輩達と一緒に作業しながら仕事を覚えるのと違って、学科にしても塗装理論、材料、工法等、すべて基礎から勉強するので、例えば非常にむづかしいといわれている危険物取扱主任者の国家試験でも、在学中に受験した塗装科の訓練生は二〇人のうち一八人合格している。

スーパー店勤務

神奈川県総合高等訓練校を卒業した私は、横浜駅西口近くにある神奈川県総合センターにある高年者職業相談室の紹介で、あるスーパー店にパートの雑役として就職した。

このスーパー店は食糧品と雑貨を主に取り扱うスーパーチェーン(連鎖店)の、正社員七人と二二人のパートタイマーで構成された中型店舗で、私の仕事は、店の内外の清掃と、一日にトラック一台分も出るダンボール、ゴミなどの整理、焼却だったが、それ以外にも一般パートに混って倉庫の整理、店内に配列された商品の補充、品出し、店頭販売の手助け等、寸暇があれば応援にかり出される文字通りの雑役だった。

しかし永い間、工場で機械相手の生活

だけを繰り返していた私には、今までの勤めと全く違った人間相手の仕事があるの珍らしく、毎日疲れも忘れて働いていた。

「お客様は神様である」と言った人がいるが、ここに来る神さまはまったくの気まぐれで、購入する品目を前もって紙に書いて来るようないしかり者は少なく、それだけに私共はこの神さま連中に「いかにして一円でも多く物を買わせるか」と秘術をつくって渡り合わねばならない。例えば簡単なようだが、棚に陳列された品物でも、その商品名の書かれたラベルを同一方向にズラリと並べ直すことによつて見易くなり、「アッ、これも買うんだ」と買い忘れに対する注意や購買心を喚起することもある。また仕入値段二〇〇円の子供用ガマ口でも、全部三〇〇円の値札を付けるより、A二七〇円、B三二〇円、C三八〇円と三段階にした場合、一番よく売れるのはBの三二〇円かCの三八〇円で、これは値段が高いからAより品物が良いだろう、という客の心理を逆にとつた商法で、その証拠にはこのAの商品もBかCに組み入れておけば数日後には必ず完売してしまうからだ。

またお一人様二ヶ限りと砂糖や鶏卵を一〇〇円で売ったり、「おいしいトーフが一元だ」と大々的に宣伝して客を釣

り込む特売日商法などは、どこのスーパーでもやっていることだが、なかにはこの特売品だけ買って帰るチャッカリした奥さんもあり、これは比較的若い人にも多いようだ。

リハビリテーション

妻が二年ほど前、雨の日坂道で転倒し腰を打って一カ月ほど寝込んでしまったので、その後はあまり外を出歩かせないようにしてきたところ、以前は二kmぐらい歩けたのに、五〇〇m歩くのもやつとで日常生活にも支障をきたすようになってしまい、その対策に苦慮していたとき、東京池袋西武デパートにある東京都老人問題相談室のことを知り、早速出かけた。そして当日の担当者だった桑名先生にお目にかかり、妻の現況を詳しく説明した結果、私の希望を入れて一週間ほど入院してリハビリの可否について検査を受けることになり、二人で入院した。

昨春秋、横浜市立の友愛病院でリハビリテーションをお願いしたとき、検査の結果脳に老人性痴呆の症状があると不許可になったことがあるので心配していたが、幸いこの病院では一週間に及ぶ精密検査の結果、とりあえず当分訓練を行ってみようとの結論が出され、以後、午前午後各一時間程度のリハビリが始められた。

この信愛病院はOT・PT等の療法士も多く、それに設備も優秀で近代化された病院だけに、遠く北海道や九州などからも壮年層の人達が来て、熱心に訓練を続けていた。信愛病院、特にリハビリ病棟では、私が今まで抱いていた病院とはまったく違って、ここには病院らしいあの暗さはまったくなく、家族のためにも一日も早く職場復帰をしたいという再起にかける執念が訓練場はもとより各病室の中にも満ちみちていた。また毎日早朝からあの長いローカなどを動力用掃除機を使って丹念に磨いていたみずぼらしい？老人がいたが、その人がこの大病院の最高責任者である長沢理事長だと知って驚嘆したのは、入院後一カ月ほどしてからだった。キリストを神と仰ぐこの病院では、毎日曜日の朝、講堂で行われる日曜礼拝の讃美歌や牧師達の話が各病室にまで流されていた。

夫婦旅行

入院して五カ月間、毎日激しい訓練が続けられた結果、入院のとき三〇m歩くのも困難だった妻が、今は杖さえ使用すれば二kmや三km位なら歩行できるまでに快復したのを見て、私は「現在の妻の年齢から考えると今後この状態があまり長く続くとも思われない。それならこの機会に永年果たせなかつた夫婦旅行をやら

う」と決意したが、これはまた私共にとって四三年目の新婚旅行でもあった。

それから二年余、妻が再度倒れた日までの旅行は続けられたが、今にして思えばこの旅行計画は、今まで何一つ夫らしいこともしてやれなかった妻に対して、たった一つの大きなプレゼントだったような気もある。また時たまテレビなどでその土地の風景が出てくると当時のことが改めて懐かしく甦えってくる。

足の不自由な妻には観光バスも無理だったし、旅館でも大浴場に連れて行けず、常に航空機とタクシーを優先させ、「バストイレ付、食事も自室で」の希望条件で旅館を選んだ。天候の悪い日には出発を延期することもあったので、どの旅行の時でも最初に泊る宿しか予約せず、その旅館の紹介で次の宿の契約をするような方法をとっていた。そのため期日も経費も多少かさんだが、でも、おそらく二人揃って二度と訪れることが望めそうにもない旅行であってみれば、それも致し方のないことだった。

退院後、最初に訪れたのは沖繩だった。日本で唯一の悲惨な地上戦がくりひろげられ、多くの島民が犠牲になった島、かつての日、中国大陸で共に戦った、その戦友の幾人かが今も眠る島、沖繩は、どうしても一度は行かねばならない私の悲願の島であったからだ。

沖繩に着いた翌日、私共は摩文仁の丘に詣りてた。沖繩戦で最後の攻防となったこの僅か一〇kmたらずの丘陵地帯に怒涛のように押し寄せる数十万の米軍に対し、熾烈、苛酷、地獄絵図ながらの死闘が繰りひろげられ、連日数千人もの軍官民が玉砕し果てていったという。六月十八日にはここから指呼の近きにある真栄平で米軍司令官バックナー中将が戦死し、それから五日後には日本軍も全滅、軍司令官、牛島中将も自決して戦争は終った。

あれから三十数年、今もお岬から吹き上げてくる海鳴りには死者の呻吟する絶望的な悲しみが声となって響いてくるような気がする。

その後沖繩には五日間程滞在し、南部戦線のほか有名な守札門や玉泉洞、そして万座毛、沖繩海洋博記念公園などを見て廻った。

昭和五十四年六月五日、札幌の千歳空港についた私共は札幌駅に直行し、当日の予定地定山溪温泉に向うはずだった。

しかし空港からの連絡バスに乗ってから「せつかく来たのだからあの有名な札幌の時計台を見て行こう」と考え直し、運転手さんに頼んで時計台に一番近い停留所で降してもらったが、そこからでも妻の足では案外遠く、時計台に辿り着いたときにはまったく疲れきっていた。

こんなわけで、妻をしばらく休息させる必要が生じ、運よくすぐ前にあったそばやに飛び込み、やっと一息ついた。注文したそばに箸をつける元気もなく、しかし客が立て込んで来るのを見ると、いつまでも居坐っているわけにもゆかず、仕方なくお金だけ払って帰ろうとした。

と、主人らしい人がソツと近寄って来て、「お客様、うちのおそばに何か不都合なことでもあったのでしょうか」と小声で心配そうに尋ねるので、せつかくの名物そばなのに、食べられなかった理由を話し、非礼を詫言びて早々に立ち去った。今でもテレビで時計台を見ると、あの時のことを思い出す。

その後も私共の旅は、山陰の鳥取、出雲、原爆の広島、九州の別府、京都、大阪、奈良、伊豆の熱海、下田、大島など、特に三男が住んでいた新潟や佐渡には数回訪れたが、昭和五十五年十二月、遂に妻もダウンし、二度目のリハビリでも再度立ち上ることはできなくなってしまうが、この多くの旅行の中には一般観光と違った目的で旅行したことも幾度かあった。次のような体験記などもその一つである。

有料老人ホーム体験記(旅日記から)

友人、若嶋さんに誘われて伊豆高原の有料老人ホーム「ゆうゆうの里」に体験

入居した。老後を子供達と一緒に暮らすことがむづかしい時代だけに、こうしたホームの必要性も多いようだ。三日間の体験入居で感じたことは、医療そのほか、諸施設や運営方法などまったく申しわけないほど整っていて、ここなら安心して老後を送れそうだが、ただ、生涯こうした老人だけの世界に住むことがほんとうの幸福なのだろうか。

伊豆斐山温泉病院

NHKの教育テレビで失語症の話を見ていた私は、今まで諦めていた、物言えぬ妻にも一縷の望みを抱き、さっそく長谷川病院長に電話し診療をお願いした。そして翌日、伊豆斐山温泉病院に出掛けしたが、懇切丁寧な諸検査の結果は、妻の頭脳は小児のように小さく委縮しており、今後リハビリを続けても効果はあまり期待できない、と診断され、失望のあまり直接自宅に帰る気もおこらず、熱海にて途中下車し、海の見える美芳館に一泊した。

箱根仙石原温泉病院に入院

日課の散歩から帰った妻が、うっかりイスの片隅に腰をかけたためイスごと転倒してから三日間、腰の痛みが薄らぐ様子もないのでようやく事の重大さに気付いた私は、専門の病院で診察を受けるこ

とにした。しかしあるいはリハビリの必要もあるかと思ひ、リハ専門の箱根仙石原温泉病院に連れて行ったが、診察の結果、やはりそのまま入院になってしまった。

入院後、本格的な機能訓練が始まったが、三年前、信愛病院で受けたときのあの訓練に対する意欲も今は薄れ、老骨に鞭うって続けられる訓練を見るのも堪えがたく、またその成果も遅々として進まない。入院後三週間、昭和五十五年十二月の最終訓練日には院長から「このまま訓練を続けても歩けるようになることは保証できない」と言われてしまった。

退院

病院周辺地区の荒涼たる冬景色にも以て、再び歩くことのできない絶望的な心と身体を抱いたまま、ふたりの旅は遂に終わった。

「冬来りなば、春遠からじ」と、今後二人に花咲く春があるとすれば、それはまた日本各地を巡り歩くことでなく、絶望から立ち上り、今後の困難な日常生活の中から「生きがい」を求めて始まる新しい生活への旅路であろうか。

介護人

七十一歳の私は、殆んど寝たきりで七〇歳になる妻と二人でのマンション暮らし

だが、晴れた日には車イスを押してよく散歩に出かける。途中顔見知りの方が「よくやっている」「感心だ」「ほほえましい」「私共も年を取ったらこんな夫婦になり度い」とお世辞を言う。「冗談じゃない。誰がすき好んでやっているものか。ほんとうは逃げ出したいくらいだ。二〇年前、倒れられてやむなく始めた私の主婦業が妻の病気の重さに比例してだんだんめり込んでしまい、今はこの有様だ」と言ってやりたくなる。でも、やっぱり六人も子供を出産しながら、名古屋で長女を、川崎で二男を、富士で三女をと、それぞれ私の転勤先で病没させてしまった悲哀を噛みしめ、あるいは前後

二回、四年半も出征軍人の留守家族という有難い？運命に堪え、またはあの激しかった空襲下を幼児を抱いて逃げまどい、あるいは戦後の苦しい家計のやりくりと食糧事情の逼迫に耐えながら残る三人の子供達を立派に育ててきたタフな妻も、遂に力も尽き果て、今はただ、私だけを頼りきって無言でジーンと見つめている姿を見ると、私はやっぱり逃げ出せない。

こんなある日の朝、洗濯をしながらテレビの音を聞いていると、結婚とか夫婦とかしきりに問答しているのが聞えたので、つい私も私にとって夫婦って何だろうと考えてしまい、後日新聞に投稿した

のが思いがけず掲載された。これは私にとって生まれ初めて経験で、こんなことから書くことに興味を持つようになった矢先の七月二十七日、同じ朝日新聞で「輪を広げる、ふだん記運動」の記事が出たのを読み、私のように素人で、文章を書くことに興味を持っている人が案外に沢山いることを知った。なお、昭和五十七年六月二十五日の朝日新聞「みんなの老後談話室」に掲載された私の文章は次のとおりである。

私にとって夫婦って何だろう

テレビのスイッチを入れたら「あなたにとつて結婚とは何ですか」と若い奥さん連中に聞いかけている司会者の声が飛び出してきた。これに対して「最高」「大きな坊や」「月給を運んで来る人」「何となく退屈な存在」「完全就職の相手」などと答えていた。

私にとって結婚とは何だったろう？

二〇年前に高血圧で緊急入院し、九死に一生を得たのに眼底出血とかで右眼が見えず、そのうえ言葉まで不自由になった妻。六年ほど前からボケてしまった妻。三年前、転倒してから殆んど寝たきりの妻。掃除、洗濯、食事はもとより、しもの世話までさせる妻。時には、ああいやだ嫌だ、と逃げ出したくなることもあるのに、あの激しかった空襲や、終戦後食

糧事情乏しく、一千万人の餓死者が出るとの噂さえ流れた激動の時代も、必死に切り抜けて三人の子供達を立派に育て上げた当時のたくましさも今は無く、精も根もつき果てた小さな体を丸めて、ひたすら私のみを頼りきっている姿を見ると、うたた人の世の哀れさも感じられ、つい何かしてやりたくなってしまふ。結婚歴四七年目の私、私にとって夫婦って何だろう。

ヒビコロコラツ
日は好日

駅に近く陽当たり最高でひな段式に丘の頂上まで造成されていた閑静なその分譲地が気に入って一五年間も住んでいたのに、なだらかな坂道を歩くのも妻には苦痛になってきたので、これ以上ここで暮らしては無理だと思ひ、転居したのは昭和五十五年八月十五日。終戦の日だった。

ドリームハイツは居住者が一万人もいる高層住宅団地で、敷地も広く、建物の間に植えられた芝生や四季それぞれに咲き乱れる花木。団地内に一〇カ所もある小公園。学校、医療機関、銀行、スーパーマーケットなど生活環境もすこぶる良好で、足の訓練を目的とした私共の散歩も支障なくできるし、また団地に隣接した大遊園地ドリームランドは、休日は無論平日でも、観光バス、小・中学生の遠

足、高校生の修学旅行など訪れる人も多く、若い人達の歓声が終日こだまして私共の心をなごまし、この団地にも次第になれていった。

ところが十二月初旬、妻が転倒し腰を痛めたためリハビリの専門病院に緊急入院したが、一カ月間の治療や訓練もその効なく、院長から「これ以上リハビリを続けても歩ける見込みはない」と診断され、やむなく退院、以後はまったく寝たきりの状態になってしまった。

こんなわけでその後の私共の平均的日課は、八時起床、九時半頃朝食を済ます

と、晴れた日には車イスに乗せて一時間程度の散歩、午後一時に昼食、以後掃除洗濯、買物、夕食の準備などをして七時夕食、あと片付けの終る午後九時頃から私の自由時間で、テレビや読書、手紙を書くなどして十二時までは就寝するが夜中の三時前後に一回ムツキの交換をする。また遠方までの買物や各種の集會に参加したり図書館などに出掛けるため、毎週一回、五時間程度ホームヘルパーさん(有料)に留守番も兼ねた家事の手伝いを依頼していた。

五十七年になって横浜市が「寝たきり

老人」の実態調査を行ったとき、ハイツの民生委員から私どものことが報告されたが、翌日にはさっそく区役所の福祉課と保健所から職員がきて、妻の病状や家庭の事情などを聴取したり、また国立病院で身体検査を行った結果、身体障害者一級と認定された。

それ以後、私どもの生活内容は大きく変化した。例えば福祉課を通じて毎週三回(現在は月水金)二時間程度、介護人(無料)が来て、病人の世話、家事や夕食の調理などをしてくれるようになったが、この人は同じハイツに住むボランティア

イアなので、緊急の場合、夜間早朝などでも頼むこともあるし、また保健所からは看護婦さんが週一回(現在木曜)に来て血圧その他の測定、手足のリハ、時には入浴までやってくれ、火曜日のホームヘルパーさんを加えると月曜日から金曜日まで毎日誰かの援助を受けることになった。また土、日曜日には家族の者、特にドリームランドがお目当の孫達がやって来るので、寝たきりの妻と二人でひっそりと暮らしていたあの頃に比べ、まったくのさま替りした現在は「日々是好日」である。△戸塚区在住▽

② 地域活動から看護婦への道

森 知子

今から八年前、日本人の女性の平均寿命は約七四歳で、私にとっては半分の折り返し点で後半生の出発点であった。

私が当時サラリーマンだった夫と、三人の子どもを持つ専業主婦から、いくつ

かの動機が絡み合った中で、五年の歳月を経て看護婦の免許を取得し、現在就職している軌跡を振り返ってみようと思う。

生いたち

私は横浜生まれの横浜育ちであるが、父は岡山県の旧制中学を中退後、横浜に来て剣道をしたがために警察官をして

生いたち
地域活動
転機
看護婦への道

いたが、終戦でレッドパージにかかり、終戦直後の混乱期に大道で三浦大根を売る露天商から出発して、立ち喰いのうどん屋、水屋、飲み屋、肉屋、惣菜屋、すし屋、食堂、喫茶店等次々に商売換えを